

東京日々新聞

九百十七号



大慈無慾近しと食う飽車あはれ其身と失ふ狐の跡ふ
 雁う魚の針ふあも慾み此を忘るが故ありまづよ
 武州青梅在のあゝ衆家あゝ切見と探側へ盛衆
 こそ置い頻るふ啼泣あゝ其家の其出て
 見ふ捕外あゝ老樹の梢は何方より来りけん
 年経大鷲羽ふけめ眼と見張り箭と鳴い今や切見
 つる去らんと
 るすあゝ
 子ぬす主
 驚き来て所持
 あそ六発の小砲あて
 現ひかてぐお落せし
 羽渡り丈余あて身のけ
 六尺余ありしとぞ嗚呼此
 大鳥も深山へ歳霜雪とちくま
 月のあ知らさるゝ然の爲に一羽千歳の
 奇と給むその鳥のあたる人ふあや
 此迷ひ多くて此境に入る者きくあうら
 あゝ嘆し給ひあゝ

待乳山麓
 新吟友人



具足屋

水川米

萬齋
 芳林